2022/11/02　　聖書研究会

聖書個所：ローマの信徒への手紙８章31～39節

〇前回の聖書個所(8：18～30)で、パウロは「現在の苦しみ」と「将来わたしたちに現されるはずの栄光」を比べ、前者は後者に比して「取るに足りない」と宣言した。今現在は様々な苦難と迫害があり、自身の内にも激しい罪との闘いを抱えているが、そのような苦しみは神様がご計画されていた宇宙的規模の救いに飲み込まれていく。私たちは「キリストと共に苦しむなら、ともにその栄光をも受ける」(8：17)のであり、将来の神様の救い、その栄光と希望を仰ぎ見ながら今現在の苦しみを、聖霊の執り成しを信じて祈りつつ、また「万事が益となるように」取り計らってくださる神様に委ねながら忍耐して歩んで行くべきなのである。

・そしてパウロは、30節で「神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになった」と、キリスト者の勝利を高らかに宣言する。キリスト者はイエス・キリストを長子とする神様の家族に連なり、「御子の姿」(29節)、すなわち御子であるキリストと同じ神の子とされるだけでなく、その本質にも似た者に変えられていく。そして、終わりの日に壮大な神の国を受け継ぐ栄光に浴するのである。神様のこうしたご計画と救いの働きは時間を越えて確実に遂行されていくものであり、その意味で私たちは単に将来の栄光を約束されただけではなくて、本質的には既に栄光を与えられた者であると確信することが出来るだろう。

・こうした希望と確信を受けて、パウロは今回の聖書個所(31～39節)で勝利の歌を高らかに歌い上げていく。

【注解】

〇「では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。」(31節)

・「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」は前置詞を巧みに使った表現になっている。英訳は、”If God is for us, who can be against us?”

→神様の裁きの法廷を意識した表現であり、神様の御計画に対する絶対的な確信を言い表した表現になっている。すなわち、神様が私たちの味方になって私たちを選び、召し、義とし、私たちに栄光を与えられたのなら、だれが終わりの日の裁きの法廷で私たちに

敵対し、私たちを永遠の滅びに定めるべく立つことができるのかと言うのである。

○神様の救いは、イエス・キリストの十字架における神様の愛によって歴史的に、現実に啓示された。キリストの十字架、またそこに現された神様の愛こそ、パウロの、またひいては私たちの確信の根拠に他ならない。

・「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか。」(32 節)

・「惜しむ」とは、あるものに執着し、これを犠牲にすることを強くためらうこと。
「死に渡された」と訳されている言葉(ἐπαρέδωκεν「パレドーケン」)は、「見放された」という意味であり、神様の裁きを表す言葉。

・神様にとって御自分の愛する独り子イエス・キリストを人間の罪のために十字架につけることは耐え難い苦しみだったに違いない。しかし、神様は私たちのために御子イエス・キリストをも惜しまないで裁かれ(＝すべての裁きをイエス・キリストに背負わされ)、見放された。

　アブラハムのイサク奉献を思い出す。「あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」(創世記 22：12)と神様が言われたように、アブラハムもまた愛する独り子イサクを祭壇に犠牲として献げようとした。しかし、アブラハムの場合は神様がその信仰を見て、イサクに手を下すことを止められたので、実際にイサクが献げられることはなかった。しかし、神様の場合は、実際にイエス・キリストを十字架の上で犠牲とされたのである。

　ここに神様の人間に対する絶対の愛がある。神様はそれほどまでに私たちを愛しておられるので、御子と一緒にすべてのものを恵みを持って与えてくださる。これがパウロの信仰の確信であった。

○「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。」(33 節)

・神様の絶対の愛を理解するパウロは、論敵たちがいかに自分の信仰義認に対して非難を浴びせようと(つまり、人が無償で神様に義とされるなどあり得ない。律法遵守という行いを通さないと私たちは義とされないのだと主張しても)、絶対の確信を持って堅く立ち、このように主張することができた。

・「訴える」は「告訴する」という意味で、神様の裁きの法廷を思わせる言葉。

・「人を義としてくださるのは神なのです」

→神様の裁きの法廷において神様御自身が私たち人間を義とされるのなら、これを誰が告訴し、有罪とすることができるのかとパウロは言う。

〇さらにパウロの確信の言葉が続く。

・「だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」(34 節)

・この言葉に言い表されているように、だれも私たちを罪に定めることはできない。それは十字架で死に、復活して天に挙げられ、神の右に座しておられる偉大な弁護士であるお方、イエス・キリストが私たちのために執り成し、弁護していてくださるからであり、そのゆえに神様御自身が私たちに無罪の判決を下されるからである。

〇「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。」(35 節)

・「キリストの愛」→十字架において現された愛、また聖霊を通して私たちに現在注がれている愛

・どのような迫害も困難も、私たちをキリストの愛から引き離すことはできない。

「艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」(35 節)

→これら一つひとつはパウロ自身が実際に体験した迫害と困難だった。彼はそれらの迫害と困難の中にあっても決して挫折せず、超人的な働きを続けることができた。それはひとえにキリストの愛のゆえだったことが分かる。

・迫害と困難を経験するのはパウロだけでは決してない。伝道者の生涯は迫害と苦難の連続である。パウロはその伝道者の姿を詩編 44：23 を引用しながら語る。

「わたしたちは、あなたのために／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている」(ロマ書 8：36)

「我らはあなたゆえに、絶えることなく／殺されるものとなり／屠るための羊と見なされています。」(詩編 44：23)

→詩編 44：23 は主なる神様のために迫害と苦難に遭っているイスラエル民族を歌った言葉であり、ラビたちは義人の殉教をここから読み取っていた。パウロはこれをキリスト者や伝道者である自分たちに適用している。かつてのイスラエル民族と同じように、自分たちも主なる神様のために終日、屠られる羊のように誰にも助けを期待することので

きない絶望的な状態に置かれていると言うのである。このように、信仰者にはあらゆる困難と死が待ち受けていることをパウロは知っていた。

ロマ書8：36の「見られている」(㊇「エロギスセーメン」)は「考えられ、見なされ、扱われる」という意味の言葉。パウロを初めとするキリスト者たちが現実に置かれていた社会的境遇が良く分かる。

・しかし、キリスト者が現実に置かれているこうした境遇は、神様の救いが不完全であるということを意味しない。「これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めてい」る(37節)とパウロは言う。

・「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」(38～39節)

・「死も、命も」共に人間を支配している巨大な原理、力。特に死は私たち人類にとって最強の敵である。(cf コリ一15：26)

・「天使も、支配するものも」　これらは霊的領域における勢力であり、「天使」は天上の勢力として良い存在を、「支配するもの」は地上の勢力として悪い存在を意味している。

・「現在のものも、未来のものも」　現在と未来において存在する一切のもの、あらゆる権威と勢力を表している。

・「力あるもの」　現実に勢力を持っている者たち

・「高い所にいるものも、低い所にいるものも」　どんなに高い天上を支配している勢力も、またどんなに深いハデス(よみ)を支配している勢力もという意味。

・このようにどのような迫害や困難の背後にある勢力も、「わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」とパウロは高らかに宣言する。キリストにおける神様の絶対の愛こそ、私たちの希望であるだけでなく、私たちの勝利の礎に他ならない。

〇今回の聖書個所から思うこと

・今現在多くの苦難も経験する私たちにとって大きな慰めの個所。どれほどの困難の中に置かれても、私たちの未来には輝かしい大勝利が待ち受けている。その希望を胸に、また 38～39 節の御言葉に励まされて、苦難もある人生を神様の愛から離れることなく歩み通して行きたいと願う。